

手前味噌

三代目中村仲蔵

〈出典：「歌舞伎新報」第五百三十三号、第五百三十六号、第五百四十八号〉

第十回 仲蔵初めて定九郎を勤む

明和^{つちのえいぬ}三丙^{つちのえいぬ}茂、中村座へ、大坂より山村友右衛門という役者下る。春狂言に曾我の対面を出す。友右衛門祐経を勤む。然るに上方訛りにて、せりふ六ヶ敷、却って見物に悪落あってはいかかならんと、近江の小藤太を勤むる仲蔵に、紋切形の祐経のせりふをいって貰う方然るべしと、相談極まりて之を勤む。素より能弁の仲蔵なれば、ヤンヤと勤め評判よければ、来春はほんとうの祐経も立派に勤まろうと、終に其翌年の春(明和^{つちのえいぬ}四丁^{つちのえいぬ}亥年)祐経の役をしてくれよと、表方より頼みしが、仲蔵は有来りの対面を勤むるも働らきのなき事なれば、何か目新らしき趣向をなして、評判を取りたきものと、日夜工風を凝し、釣狐^{つりぎつね}今様の工藤を勤む。此時の五郎時致は五代目団十郎、また兄の祐成は二代目門之助にて、仲蔵は玉子色の繻子の着付、羽織を肉色^{にくいろ}面^{めん}尽し代付の縫目を驚かす程立派なものなり。此羽織着付の代計りも一興行の給金を丸で懸しという評判にして、衣裳ばかり見ても直打があると噂しけり。実に当時の質素思いやるべし。扱、仲蔵は狐の面を冠って遣る積なりしを、狂言作者^{かおんいさんしやう}金井三笑日く「是は誠の狐ではなし、今様を勤むる役なれば、狐の面を冠らずに紐をつけ、胸へ掛て出た方がよかろう」と教えしが、仲蔵はこれを聞ずして、矢張面を冠り、出てより跡にて取る事にせしという。立作者^{たてつくり}の三笑が勢いも強ければ、仲蔵め己が詞^{ことば}を用いぬとて、是が喧嘩の基にて、生涯互いに一座しても物を言ざりしと。仲蔵浅黄^{あさぎ}の頭巾に狐の面を冠り、杖を突、真中に立身にてせり出す。天窓が見えると、栄屋秀鶴^{さかえやしゅうかく}栄屋秀鶴と、見物声を懸る、其内段々五郎十郎の顔が見えると成田屋滝野屋成田屋滝野屋と、棧敷も土間も、わるる計りにして、大評判大入をなせしといえり。

同年の五月狂書は忠臣蔵と据り、夫々の支度調いしが、是程評判のよき仲蔵の処へ、何ともいって来ず、同人も不思議に思い、何の役が来るか、大てい己が腹にも、是が来ようとは思えど、沙汰なきは何か外に役の納まらぬ廉でもあるかと、待にまつたる折柄、表方より「どうか是を演て下さい」と、斧定九郎の一役をもつて来る。仲蔵むつとして、扱は春狂言に面を冠った一件で、三笑めが腹を立、今度己に腹をたてさせ様と思、是迄相中^{あいちゆう}がする定九郎をたった一役もつて来も、大かた彼めが差図ならんと、よしよしと、大体のものなら怒って此芝居は休むと言出すべきに、名人上手と後世に名を残す秀鶴ゆえ「承知した」と快くうけて表方を戻し夫より定九郎の工風を考えたり。此定九郎は是迄は相中の役にて、例の五段目へ出るにも、山岡頭市に大縞のどてら、丸グケの帯、紐付もも引、重ねわらじという拵らえにて、自分も相中の時分に一度勤た事あり。今度は何とか風を変てヤンヤとやって退たしと、種々工風を凝せしが、扱よい思い付もなく、初日間近くはなるし、随分困りいたり。仲蔵思うに、斯^{こゝろ}いう時こそ神仏へ願懸して、お力を借るこそ第一なれ、日頃信仰なす柳島の妙見さまへ日参して願うて見ばやと、精進潔斎して、何卒古今未

曾有の工夫を授け給えと、寝食を忘れ、一心を込めて信心をなせしが、争で是程の誠心通じざらんや、^{たちま}忽ち一つの思い付を浮みしは、仲蔵其頃は住吉町に住居して、七代目杵屋喜三郎の娘お岸を娶^{めとり}て妻となし、ほんの夫婦差向いで折々下男の一人も置く位いなれば、^{かの}妙見さまへ参詣するも、ただ一人なり。話し、横道へは入りて、此時より七ヶ年程先の事なりしが、矢張妙見さまへ参詣して帰り懸に、或る茶屋へ休み休息なせしが、^{そのかたわ}其傍らに居る百姓体の男。仲蔵に向い「お前は役者の仲蔵さんだな」という。仲蔵不審に思い「如何にも私しは仲蔵だが、お前さんは何方のお人」と聞く。其者答えて「其御不審は尤^{もつとも}だ。お前の方では知るまいが、何を隠そうお前を五ツまで育った、平井の渡し守の、私しは次男の八五郎という者にて、お前とは実の従弟^{いとこ}同士、今では請地^{うけち}村の、或百姓へ養子にゆき、どうか斯か暮して居る」と名乗しに、仲蔵は涙を浮べ「誠に夫はおなつかしや、我等親類とてもあらねば幸いなり、どうか是から往復^{ゆきかえ}して親類になって貰いたし」と、心実見えて頼みしかば、八五郎も悦び、夫より互いに問^と問^と聞^きれッして、毎々八五郎も仲蔵方へ泊り、仲蔵も八五郎方へ、^{たまたま}遇々には一泊す。爰に請地より遠からぬ本所に、或お旗本の御隠居にて、碁を好むお人ありしが、常々八五郎方へ遊びに来られ、碁を囲む。八五郎も相手をして夜を更^{ふか}す事度々あり。仲蔵も此道を少しばかり好む故、此御隠居とも手合して、所謂碁敵^{ごがたき}とやらにて至って中睦^{むつま}しくなしたり。其後八五郎が近処に、能下屋敷の売物ありとの話しを聞、仲蔵悦んで之を買求め、次男安五郎が名前にして同所に住わせ、百姓をさせ置、折々は夫へも一泊して、彼御隠居を招て、碁を囲み楽しみしという。扱、はなし元へ戻って、例の如く妙見さまへ日参し、本所の南割下水の辺まで来懸し頃、ポツポツと大粒の雨が降て来たなと思う内、夏の日の常なれば、そちこちする内、大夕立となり、車軸を流す大ぶりに、仲蔵は俱は連^{ともつれ}ず、夕立や法華欠込む阿弥陀堂にはあらねど、余儀なく傍^{かた}えの蕎麦屋へ欠込、暫らく雨を止ませ、蕎麦をも喰って、晴間を待つ内に、是も同じく雨に逢いし人と見え、ズブ濡^ぬにて蕎麦屋へ欠込「アア酷い雨に出^{ひど}くわした」と、いうを思わず見れば、年の頃三十四五とも覚しき浪人にて、何処でか借て来たりしものか、破れた蛇の目傘をさし、黒羽二重^{ひきとき}の引解^{ひとえもの}の單物を着て、肩の出る迄に腕^{うで}まくりして三のづ迄裾をからげ、茶小倉の帯へ、朱鞆の大小落しざし、くすべの鼻緒の雪駄を腰に挟み、傘の雫をふるい、かたえに立てかけ、五分月代に水が含みしを、手にて撫^{なで}ればダラダラと雫落る。その外袂^{たもとつま}褌^{しほ}を絞^{しぼ}り、向うに腰をかけ蕎麦をくう。仲蔵是を見て、心中で横手を打ち、是ぞ今度の役にそっくらはまりし拵^{こしら}えなりと、獨り悦び、雨の止むまで同所に居て、とっくりと拵えを記憶し、日和^{ひより}に成てより立出て、再び柳島へ戻り、只今の浪人の拵えにて勤めたらどうで^{ごさ}り升^あると、御籤^{みくじ}を頂きしに大吉なれば、愈々お告ならんと、信心肝に銘じ、妙見さまへ御礼をいいて、夫より碁友達にて心易き彼御隠居の内へ立寄「此度定九郎の役が当り、何か目新らしき拵えをと、工風を凝し、実は妙見様へ日参を致し候処ろ、只今、夕立に出^{これこれかくかく}遇い、是々斯々にて浪人に出^いくはし、是れぞ妙見さまのお告ならんと思うが、御隠居様如何^いで御坐りましょう」と、残らずはなして相談するに、御隊居も横手を打ち「誠に是れぞ妙見宮の御利益に疑がいなし、我等が聞てさえ、定九郎には打てつけなり」

と、隠居も大受なれば、愈々よろこび、八五郎方へも立寄らず、嬉しさの余り帰宅して、其翌日は早速、熊の皮の毛の厚き所を求め来たり。自身に鬘を拵らえしが、是迄は熊の皮の毛の後ろへ向け、生なりに張るが通例なりしを、今度は毛先を前へ冠る程にして張る。是例の水を含ませ、撫れば雫がタラタラとたる為なり。雪駄にては海道の賊にならずと、此時は福草履を後ろへ挟む事にして茶小倉の帯、朱鞆の大小を用意し、夫より滝野屋（門之助）へ行き「判官か勘平が着た黒羽二重の引解があるなら、借用したし」と頼む。門之助は、何に遣うか分らねば「あるはあるが、引解は皆古物なるが、どうであろうか」と聞く。仲蔵は「其古いのが此方の望みなり」という。「夫れは妙だ。二階へ行って長持を開け、二人で捜して見よう」と、気軽に立って捜して見るに、丸に鷹の羽の紋付きし、羊羹色のがあれば「是れがよい」と借りて戻り、是にて万々支度整いしゆえ、与一兵衛を勤むる役者を極内々で宅へよびよせ、口留に金を遣って、人知れず稽古して、一切素知らぬ顔で初日を待つ。床の太夫三線弾へも、多分の祝儀を出して、是れへも夫々誂らえ置きし事なれば、誰一人かかる趣向のある事とは夢にも知らず、仲蔵さんは、この前一遍した役ゆえ、稽古も碌々仕なさらぬと、云わせ置きしが、愈々初日となれり。

此日、仲蔵は破れた蛇の自の傘を密と鏡台の向うへ隠し、我部屋は大部屋の突当り故、居爐裏に人々見て居るのも、一向平気にて、体を白く塗り、件の手拵の鬘に、黒羽二重の引解朱鞆の大小、傘をもって、障子を下りる。皆々これを見て、また芸気違いが妙な思い付をするぞと、誂り居たり。仲蔵はここぞ、一生懸命、若しくじったら今日を限り江戸には居ぬと、心を定めし事なれば、誰が何と言うとも頓着せず、湯殿へゆき、鬘へ水をふくませ、体へも水をあび、傘を濡しなぞ、自分独りでして、お囃子の前を通るに、雫が落ければ、囃子よりカスを食い「ハイ御免なさい御免なさい」と誤り乍ら揚幕へゆく。与一兵衛の出になり、一筋道の後ろよりと文句をきり「オ、イオ、イ」と声を懸て出ると、見物一同ワツとうなり出し、暫時は鳴も静まらず、夫ゆえ肝心のせりふを言ても一向聞えず、仲蔵心中に、南無三しくじりしか、初日から斯う悪誉をされる様では、我未だ開運の時来らずと見えたり、帆を懸るは兼ての覚期、今更中途でよせもせず、是迄工風を凝した丈は遣って退て、跡の定九郎が困る様にして呉んと度胸を据え、夫々猶々狂言を下へ置、例の鉄砲が鳴り、血紅を腹へぬり、素肌をぬぎくすぼりかへつて死したるは、心地よくこそト含み紅を仰向いてプップ、と吹出し、其紅口の廻りへ懸り、あまりをタラタラと腮より咽へ流し、手先をもがき、チチチチと白眼し顔色の凄さ、子供が泣出す程なれば、見物は只恐れ入り、こんな定九郎を見た事なき故、芝居も崩る計りの大うなりなれど、車輪になりし仲蔵には、ただ見物が悪誉するが忌々しいと思えば、是が当分舞台の名残だと、いよいよ魂しいを落付て、幕切に財布の紐を引れ起上る時、眼をむき口をアングリあいたままの顔を見ると、ソリヤ又と云って、ワツとうなり、猪より先へいつさんに飛がト紐を切ると、上手へ猿返りをして、如くにト幕になる迄、少しも絶間なく、見物ワイワイとうなり詰なれば「エエ己が面さえ見ると、笑やアがる」とつぶやき乍ら、湯殿へ行き血紅を洗い、稲荷町へ預け置たる浴衣を引かけ、三階の部屋へゆく。外役者も余

り度を過したる大出来ゆえ、皆々只呆れ果、とんだ役者が出来る物だと、心中にて誉る人のみなれば、誰有て物云ものもなく、毎例よりみつ気なれば、愈々事を毀せしならんと思ひ、何となく長居も成ずと、鏡台其外の物は樂屋番に頼み仕廻い、髪もそこそこにして宅へ帰り、何となく鬱ぎ居たりしが、改たまって妻お岸に向い「扱、凝ては思案に能わずとは、今日初めて發明したり、我は上々の工夫と思ひしが、未だ時節が来ぬと見え、見物の腹へはまらず、出ると一同吹出し悪誉されしが、此事に付いては、そちにも兼て言置し如く、是でしくじらば江戸には居ぬ覚期故、結句思いつた事を残らず、誰憚る所なく遣つて退けたれば最早心残りなし、日が暮たら大坂へ出立せん、彼地より迎いをよこす迄は、請地の八五郎殿に、万事頼み置たれば、よろしく何事も相談せよ、暫しなり共今宵が別れ、目出たく離盃を傾けて快よく出立すべし」と、思ひ入つたる夫の詞に、何と止むる詞もなく泣々旅の支度を調べしが其頃は、はや芝居も打出しと見え、ドロドロと見物の足音して、きょうの噂取々なり。仲蔵なまじ人に顔を合はしては、恥の上塗と妻に別れを告て、小風呂敷包に脇差を帯び、脚絆は穿かず、草履にて笠を冠り、住吉町より葭町へかかり、親父橋を渡り、打出しの見物に押れ乍ら、我家を跡に旅立仲蔵が心の裏、哀れというも愚かなり。

第十二回 定九郎の条 第五百卅六号の続

去程に仲蔵は、見物の帰りの人々に押れながら、四日市の江戸橋際まで来たりしが、行く人の過半は、皆定九郎の噂さのみにして「仲蔵の定九郎は実に不思議だった」という事耳に入る。仲蔵は不思議と言ふは、不思議に悪いという儀ならんと、耳そば立て付ゆくに、四日市よりしん場の河岸へ曲る角に、一群包二三ヶ所に集りて、芝居の評を為す人あり、是をも聞ばやと其中に交りて立ぎくに、皆々余の役の評判はなくして、孰れも定九郎の評計りにて「何と仲蔵が工風はえらい物なり、彼様定九郎は前後に聞ず、黒羽二重に蛇の目の傘、浪人の拵えは、如何にも主家退転の後、京都辺りに流浪して、祇園島原をぞめき、江戸でいえば吉原の地廻りかごろ付、しょうことなしに街道筋で、追剥をするというは左もあるべし、能くアノ拵えに気が付た」と「鉄砲の弾丸をくらい、含み血紅を吐く所ろ迄、外に類くない、上出来」と、どの群も皆感心して語り居るにぞ。爰に初めて仲蔵も、扱は己がしくじりと思ひしも、見物衆には左までの不評にてあらざりしか、先此塩梅では、座中の人も満更でもあるまじと思えば、既に旅立の支度をしたも、心におかしく、何の是では他国へ帆を懸る（劇場道にて欠落をする事を、通言帆をかけると云）には及ぶまい。暇乞をした嬪アの手前、チト面目ないが、こっそり我家へ帰ろうと、思ひ歸して道を急ぎ、頓て我家の門へ来て、内の様子を窺えば、誰か客来あると見え、挑灯の明り、格子の隙よりさし、何か女房と話し声に、猶も耳を傾け聞くに、此客は是師匠なる、伝九郎方よりの使いにして、仲蔵さんに直お出、との迎いなれば、仲蔵は這入ても差支えなき人なりと思えば、真顔に何喰ぬ体を為し、格子を開けて内に入れば、女房は何故に帰つてお出と、心中に驚きしが、元より気転のお岸なれば、早くも夫に目配せし、勝手の方よりお

這入と、云ねどしるき妻の仕こなし。心得たりと格子を出、狐鼠狐鼠勝手の口を開け、笠脇差ふり分荷物、脚絆草履を手早く解き、端折し裾を下しながら、内に居たる体にて出
 「是は御苦勞、今一寸お参りにいって戻った所、旦那のお迎え、跡よりというも何やら失礼なれば、直に同道致すべし、お岸紋付の羽織を出せ」と、其場を程能云粉らせば、女房もアレ程暇乞の盃までして出た夫が、再び帰りて、迎いの人と一所にゆくとは、如何した事かと、胸の動気の納らねど、四五年は別る気で、互いに歎き悲しみしに、思い懸なき此帰宅、どういふ訳と聞度も、使いの前を憚れば、心ならずも羽織を着せ、切火打かけ「お早う」と、格子を開て出し遣れば迎いの者と同道して、伝九郎方へぞ赴きしとぞ。

第十三回 仲蔵が手柄、師匠伝九郎脇差を譲る

扱も仲蔵は師匠伝九郎の招きに応じ、取ものも取敢ず、使と同道して往て見るに、果して師匠は悦喜の体にて「マアマアずっと爰へ来よ」と、手を取る如く傍へ近づけ「扱今日の大手柄は昼の内より聞居たるが、実に市中も轟く程の大評判、弟子の手柄は師匠の面ほく目、出かした出かした」と、大悦びにて、先持合せし盃をさし「快よく一杯を傾むけよ」と、自ら銚子の酌をして賞賛数刻に及びし後、頓て箆筒の引出より、脇差を取出し「差古びたれど、是は去やんごとなき君より賜りし脇差なり、きょうの褒美に与えるから、上下差にするがよいぞ」と、舞台めきたる出立の彼お刀拝領に、仲蔵は唯「ハイハイ」と有難涙に暮る而已「忝なし」という声さえ、曇りて頓には云ざりしが、伝九郎の妻も、傍らより詞を添えて、手柄を誉め「さぞ日頃の工風にて、きょうは取分、お勞れで有ろう、早う帰って手足を伸ばし、緩々休息したがよい」と、いうたる詞を汐にして、師恩を厚く謝して後、暇を告て帰宅せしが、内には女所帰るを待ち、いそがわしく傍へ寄り「彼程決心して出られしに、何故途中より帰られしぞ、何か障りのある事か、但しは忘れた物でもありてお帰りありしか、其訳を早く聞して下され」と、詞世話しく問いかくれば、仲蔵は気を落つけ「まずまず悪くない話しじゃ、表の戸締した後に、ゆっくり訳を話すべし」というに、漸やくお岸も安堵し、締りをなして夫の傍へ据れば仲蔵声をひそめ「扱きょうの定九郎一件でまんま舞台を遣損ね、帆を懸る了簡で、其方にも暇を告げ、四日市まで行し所ろ、見物が所々に集り、種々評をさるる中で、己が勤めた定九郎が殊の外評判よく、古今稀だと聞たゆえ、猶も彼処爰処きき合せたが、孰れも評がよい方なれば、是では何も他国へゆく支度をせねばよかつたど、心におかしく、帰った所へ、師匠よりの今の使い、旁々話す暇なければ、手前が氣転の詞を汐にいった所が案の定、御賞美あって此脇差を頂戴して帰った」と、話せばお岸は夢の中にまた夢見たる心地して、果は互いに手を取り合い、嬉し涙にむせびけりと。畢竟かかる大手柄をなせしも、是皆仲蔵が頃日の勉強にありし事なり。当世の俳優たるもの、よく此條を味うて平素手柄を心懸るこそ肝要なり。